

### 第3回「福井県文化振興プラン（仮称）」策定委員会 議事録

- 1 日 時 令和6年1月26日（金）13:30～15:30
- 2 場 所 福井県庁 6階 大会議室（オンライン併用）
- 3 出席委員 委員名簿のとおり
- 4 事務局 事務局：福井県交流文化部文化・スポーツ局 局長 猪嶋 宏記  
〃 文化課 課長 三武 紀子 他4名
- 5 配布資料 別添のとおり

#### 6 議事の経過および結果

##### （1）議事1：「福井県文化振興プラン（仮称）」案について

【資料1】【資料2】により事務局から説明

##### （2）議事2：意見交換

<出席委員の発言概要>

[委員]

- ・ プラン案の中の企業メセナの説明について、「企業が資金を提供し」を「企業が資金等を提供し」に修正してほしい。ただお金を出して下さいと言っても企業に響かない。芸術文化を応援することが、企業にメリットがあることをしっかり伝える必要がある。企業のブランド力を高める上でメセナ活動は有効。それは、商品のブランド力ではなく、企業のステータスが上がるということ。
- ・ 高等教育機関について、社会の創造性を高めるための教育を進める高等教育機関を、福井県内でもっと盛んにしていく必要がある。必ずしもプランに掲げる必要はないかもしれないが、忘れないでほしい。
- ・ 行政には、様々な分野の専門官がいるが、文化政策については専門官がいない。だからこそ、プランの中で構築を検討されている「文化芸術コネクタセンターに（仮称）」には、専門家を置くことが必要。専門家を置くことによって制作の実（効果）が上がる。専門家には、ある程度の権限を与えて、予算の執行（運用）についても委ねてほしい。
- ・ また、その専門家は、ある特定のジャンルに詳しい人というよりは、マネジメントの専門家が重要ということ。アーティストや実作者である必要はなく、アーティストの理解者でなくてはいけない。
- ・ 県民ネットワーク型のアートプロジェクトを推進してほしい。北陸で民間が芸術文化に関するネットワークを組んで、能登半島地震の復興支援を行うと良いと思う。芸術文化が被災地における生きる力の源泉になる。日ごろから、県民主体のアートプロジェクトのネットワークを日ごろから構築しておく、こういう時にも役に立つ。

[委員]

- ・ 資料1の中に、「福井」という言葉が十箇所出てくるが、「福井」を「北海道」や「沖縄」に置き換えても完全に通じる。「福井らしさ」をもう少し出すことはできないか。

[委員]

- ・資料1について、文字が多い。プランの中で重要な言葉であるはずの「ウェルビーイング」が大事に扱われていない（途中で改行されている）。
- ・わかりやすく伝えるためのものならば、県民が興味を持って手にとってくれるよう、音楽や美術や伝統芸能、お祭りなどのイラストなどを表紙にちりばめるなど、見た目を改良する必要がある。
- ・表紙に「福井らしさ」と書かれているが、まずはそれが何か、福井県をどうしていきたいのかをしっかりと示すべき。

[委員]

- ・「福井らしさ」を考えたとき、やはり歴史と文化の厚みというのはあると思う。そういうところから、「福井らしさ」をこれらに向けて形作っていくためには、伝統芸能やお祭りだけでなく、これまでの芸術文化の活動や歴史を積極的にアーカイブ、ドキュメンテーションし、それらを発信していくという機能が、例えば「文化芸術コネクセンター（仮称）」の役割としてあってもよいと思う。
- ・それぞれで開催されているアートプロジェクトにしなやかなつながりを持たせることで、表現者や創造者でない人もタッチできるポイントが作れるのではないかな。
- ・アートコミュニケータの活動やアーティストインレジデンスは、「歴史や文化の厚み」と直接的に関連するところなので、そういうところから、今につながる「福井らしさ」を考えていくこと「独自性」を見つけていけるのでは。
- ・若手アーティストの育成の部分で、県外に出ているアーティストも県内の活動に参加できるようなポイント、機能を作れるとより良い。発表することだけが目的になったり、しないといけないと義務感にならず、制作や創作に関して充実した地域としての福井の見せ方、あり方も検討できるのではないかな。

[委員]

- ・よいプランになったと思うが、国際的に広くつながっていくプランにしていくのと同時に、地域に染み込んでいくような根っこの部分がほしい。自分事として身近に感じてもらうためには、「プランに書いてあることが自分の住んでいる地域でいうとどういうことなのか」具体的に理解してもらう必要がある。そのためには、それぞれの地域の伝統芸能や伝統工芸などを織り込んだ身近に感じることを出来る、各地域版の資料をつくとよいのではないかな。
- ・コネクセンターの専門家には、ぜひ社会学者を入れてほしい。越前、若狭に分れる文化、地域の特徴と結びつく伝統芸能など、福井の文化をしっかりと理解している人が必要。

[委員]

- ・各エリアでどういったことをしていかななくてはいけないかがわかるような仕組みを、このプランを展開する中で作っていく必要がある。
- ・このプランは、まず県民に見てもらった必要がある。誰に響かせるのかを考えながら実際の運用をしていくことが重要。「福井らしさ」も内向けと外向けがあるので、そこをしっかりと考えてほしい。
- ・専門家と市民をつなぐインタープリター人材が必要。ミュージアムの専門家が地域とつな

がるには、その間をつなぐ人材が必要であり、養成していく必要がある。

- ・ 様々な産業都市が文化にシフトしている。日本もそのような時代になってきている。例えば北九州も「創造都市」を掲げてアートセンター的なものを構築して、そこから産業を生み出そうとしている。プラン案にもそのようなことが書かれているが、どのように実現していくかという具体的な方策（アクションプラン）をどのようにしていくかに興味を持っている。

#### [委員]

- ・ 身近な人に話を聞いてみても、日ごろから文化施設に行く人と行かない人が分かれていて、文化施設に行くということそのものが一つのハードルになっていると感じた。県立文化施設の充実と、施設という枠をはみ出して外に出ていくこと（まちなかや地域で文化芸術の入口があるということ）の2つの軸が重要。
- ・ 「文化芸術コネクセンター（仮称）」がこのプランの核になると思う。県民からすると、いつからどこにできるのかが気になるころなのでは。
- ・ 「福井らしさ」は、コネクセンターのあり方で見せることもできると思うので、期待している。

#### [委員]

- ・ プランは、学校における年間の指導計画のようなもの。各先生の授業展開によって、その内容が大きく異なるものとなる。この意味において、「文化芸術コネクセンター（仮称）」における事業が適切に展開できるシステムを作っていくことが大事。
- ・ 「音楽・舞台芸術」「ビジュアルアート（純粋芸術）」「デザイン・クラフト（工芸）」の分野は、それぞれに求められるマネジメントの専門性が異なるため、コネクセンターでは適切な人員配置が重要。一人が複数分野を担当するのは避けたほうが良い。民間企業のノウハウが必要な場合もあるため、アドバイスやサポートを求められないか。
- ・ コネクセンターの機能としては、表現者が「自分はこんなことができます」という内容の企画書を提出し、これらを集約して公民館などに配布し、活用してもらおうという形での展開も想定される。
- ・ 予算について、近年、大学の研究資金を含む補助金制度が基金化する傾向にある。それにより、予算をより柔軟かつ効果的に使える。また、競争的な補助金は、申請書を作りなれている人に資金が集中しやすく、特に若年層が資金を得にくい現状がある。若い人たちの活躍を支援する体制をつくることは、「メイドイン福井」の価値向上において重要である。

#### [委員]

- ・ 中学生や高校生が芸術系の道に進みたいと思っても情報が無い。例えば、まちなかに、コーディネーター人材がいて、中高生が相談に行けるような拠点があるといいと思う。

#### [委員]

- ・ プランが企業でいう4年間の事業計画書と考えると、4年目には黒字にしなくては行けない。具体的な数字にするのは難しいと思うが、県民の目線としては、プランに書かれたことをやって、どのくらい効果・成果がでたのかというところだと思う。

- ・「文化芸術コネクセンター（仮称）」で効果的な事業を展開するには、兼任ではなく、専任者を配置すべき。その人にある程度の権限も与えていくべき。
- ・地域の文化を支える人材の確保が重要。それぞれの地域で、どのような人がどのような思いで（地域の文化の継承・活用に）取り組んでいるかが見えてくると、中小企業の協力につながりやすい。

#### [委員]

- ・若手にハンドダウンしてものごとをお願いしていくための工夫をしていくべきであり、予算を動かすときにも新しい観点を入れている必要がある。補助金なども、申請ベースだと平均的なものが多く評価されがちだが、評価が割れているもの（エッジなものが含まれていることが多い）に注目してみることも、一つの有効な工夫だと思う。
- ・国際性を目指すのであれば、ローカリティが重要。地域にきちんと根ざしているものが海外でも高く評価されるようになってきている。地域性に違いがあるのであれば、それを前面に打ち出していくべき。
- ・プロジェクトマネージャー的な人材について、大学でもプロデュース、マネジメントをしたいという学生が増えている印象だが、バックグラウンドがないままにプロデュースはできないと思っている。

#### [委員]

- ・大学で教えたからといって人材が育つわけではない。OJTをしなくては人材は育たないので、職を作っていく必要がある。
- ・「文化芸術コネクセンター（仮称）」はプランの核になる。「芸術文化アドバイザー」という言葉も出てくるが、コネクセンターとの関係、位置づけをプランの中で明示した方が良い。
- ・「文化芸術コネクセンター（仮称）」では、専門人材を公募して雇用することになると思うが、それはぜひ全国から募るべき。積極的に外部から人を雇った方がよい。そう考えたとき、「コネクセンター」という名称で伝わるのか、興味をもってもらえるのかという疑問がある。
- ・障がい者のアートについて、障がいのある人もアウトプット（展覧会、創造活動）だけではなく、鑑賞も大事にすべき。鑑賞の機会や場の創出を。例えばバリアフリー演劇など、県の事業として取り組んでほしい。
- ・若手アーティストの育成を図るとき、県内に収まらない、グローバルな視点が必要。海外に武者修行に行かせるとよい。アーティストインレジデンスは、世界中にある様々なレジデンスがネットワークを結んでアーティストを派遣しあうのが本来の姿。地域からアーティストを世界に送り出すということを、アーティストインレジデンスの中でやるべき。
- ・このプランに反映しなくてもよいので、能登半島地震への対応をすぐに行ってほしい。能登半島では工芸作家も大きな被害を受けている。修行していた若手作家は地元に戻って、工芸をやめてしまう可能性がある。そういう若手作家に活動と生活の場を提供し、福井で工芸活動をしてもらうようにするというのを、ぜひやるべき。
- ・指標について、3つ目の「過去10年間の活動の傾向について、発表の機会が増えた」と回答

した文化団体の割合」は指標として適さない。調査地点の前後の状況で変わってきてしまう。例えば、文化を目的に福井に観光にきた人の割合などにしてはどうか。また、文化の振興は必ずしも数値で測れるものではないので、あくまでも参考値だ（目標値ではない）ということをしかりと書いておくべき。

- ・ 東日本以降、全国の自治体で遠く離れた自治体と災害協定を結ぶことが増えている。ぜひ、日ごろの交流として、防災予算を使って文化交流をやってほしい。

#### [委員]

- ・ 子どもが大人と一緒に集まる場で、地域のアーティストなどが何かしてくれると、子どもとっても大人にとっても文化芸術活動のきっかけになる。
- ・ それぞれの地元にこんなアーティストがいるということを学校にも知る機会があると、活用しやすくなる。

#### [委員長]

- ・ プランの中身としては充実したものになったのではないかと思っている。これをどう実装していくかが重要であり、県民一人ひとりが、プランの内容について「これは重要だからぜひやっていくべき」「自分も一緒にやっていきたい」と感じてもらえるような流れを作っていくことが必要。
- ・ 福井の人も知っているようで知らないことに光を当てていくことで、福井の文化の厚みが今の時代にも生きていくということを感じてもらえるようにできるとよい。
- ・ 「文化芸術コネクタセンター（仮称）」をどのように作っていくかも重要であり、やはり専任者をつける必要があると思う。できるだけ若い人の人材育成をしながら職を作り、外部の専門家に関わっていただきながら、早急に具体的な組織づくりをしていかななくてはならない。
- ・ 文化芸術の振興は、多領域にまたがる意義を持つ。例えば福井のブランドを作っていくことにもつながる。行政の中でも、文化課だけではなく、すべての政策に文化は密接にかかわっているということを理解してもらえるように動いていってほしい。
- ・ 教育に関して、今すぐ県内に芸術系の大学をつくるのは難しいと思うが、いろいろな大学で文化芸術を通じてクリエイティブな発想を持つ人を育てるための取組みができるとよい。また、子どもたちが文化芸術に触れる機会の拡充もぜひ進めていくべき。

### (5) 閉 会

#### [事務局]

- ・ 今後のスケジュールとして、本日いただいたご意見をもとに修正を加えた上で、2月13日からの2月議会での議論、同日からのパブリックコメントを経て、県民の皆さんからのご意見を反映し、修正を加えて最終案としていく。
- ・ とりまとめについては、朝倉委員長にご一任いただき、委員の皆様には後日最終案をお送りさせていただくということ対応させていただきたい。